

教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力Ⅱ

－ 児童・生徒の変容の見取りを通して －

1 はじめに

児童・生徒は、未曾有の災害、少子高齢化・人口減少、感染症等の直面する課題を乗り越え、AI やビッグデータ、IoT、ロボティクスといった技術が発展した Society5.0 時代を見据えて、急激に変化する時代を生きていく必要がある。そのような時代の中で、我が国の学校教育には、一人一人の児童・生徒が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

令和4年12月には、中央教育審議会答申として『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～』が示された。この答申の中で、「新たな教師の学びの姿」として、以下の4点が挙げられている。

- ・変化を前向きに受け止め、探究心を持ちつつ自律的に学ぶという「主体的な姿勢」
- ・求められる知識技能が変わっていくことを意識した「継続的な学び」
- ・新たな領域の専門性を身に付けるなど強みを伸ばすための、一人一人の教師の個性に即した「個別最適な学び」
- ・他者との対話や振り返りの機会を保障した「協働的な学び」

つまり、Society5.0 時代における教師が、時代の変化に対応して求められる資質能力を身に付けるためには、個々の教師が養成段階に身に付けた知識技能だけで教職生涯を過ごすのではなく、求められる知識技能が変わっていくことを意識して、継続的に新しい知識技能を学び続けていくことが必要だといえる。教師には、その中で得られた学問としての知見を、学校教育の教科等の中で、学習内容や方法を精査して教育実践していくことが求められると考えられる。

以上の事を踏まえ、本研究では、授業づくりに関わる教師の資質能力に焦点をあて、小・中学校教員が連携・協働して研究および授業実践を行うことにした。その際、これまで本校の研究で追究してきた「教科等本来の魅力に迫る授業」に関する授業づくりの視点を基に、教師の資質能力を具体的に明らかにすることにした。

2 研究の経緯

本校では、令和元年度から令和3年度まで「教科等本来の魅力と学びのつながり」を中心に、児童・生徒に「グローバル時代をきりひらく資質・能力」を育むための学びを豊かにする授業を、小・中学校教員が協働して研究および授業実践を行い、深化させてきた。

その中で、教科等の内容特性を加味し、教科等本来の魅力（教科等の本質）¹⁾の具体を検討するとともに、教科等本来の魅力に迫る授業づくりを行ってきた。

令和4年度からは、教科等本来の魅力に迫る授業づくりの視点を踏まえて、教師の資質能力を具体的に示すことを目指した。

Schön（2007）は、『省察的実践とは何かープロフェッショナルの行為と思考ー』（柳沢ほか監訳）の中で、「有能な実践者は日々の実践の中で、適切な判断規準を言葉で説明できないまま、無数もの判断をおこなっており、規則や手続きの説明ができないまま、自分の技能を実演している。」と述べている。教師の資質能力を具体的に明らかにすることは、教師自身の暗黙的な行為を自覚化することにつながり、自身の授業を省察的に捉えることにつながると考える。

また、授業づくりに関わる教師の資質能力は、教科内容に関する知識や素材を、教育実践の文脈や児童実態を踏まえて教材化するプロセス等、「①授業を構想する段階で発揮される資質能力」や、授業中の見取りや価値付け、マネジメント等、「②授業を実践する段階で発揮される資質能力」、児童・生徒の変容を分析・評価し、児童や教師自身へフィードバックを行うこと等、「③授業を分析・評価する段階で発揮される資質能力」等が考えられる。

これらの資質能力の具体を、授業実践を基に協議するために、各教科等で共通の枠組みを設定することにした。各教科等で共通の枠組みを設定することにより、教科等を越えた汎用的な視点や、教科等固有の視点を整理することができると考えた。

表1 東雲小・中学校が捉える教師の資質能力

資質能力	資質能力の説明
授業構想力	○児童・生徒の実態や、学習内容を踏まえ、児童・生徒がさらに伸びるための目標を判断する視点（目標設定） ○教科等の本質を捉えて、素材を教材化する視点（教材研究）
授業実践力	○目標、児童・生徒の実態及び学習内容を考慮して授業を行う視点（価値付け、板書、ファシリテート、机間指導等）
授業分析・評価力	○児童・生徒の実態を分析・評価し、自身の実践を改善する視点 ○児童・生徒の実態を分析・評価し、児童・生徒に対する形成的評価を行う視点

そこで、東雲小・中学校それぞれの授業研修において、これまで授業観察の視点として設定していた項目を基に、教師の資質能力を表1に示すような「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」の3つの項目に分類した。

次に、各教科等で授業実践を通して、教師の資質能力の具体を検討した。その結果、各教科等における授業構想力や、授業実践力、授業分析・評価力の具体の一端を明らかにすることができた。

また、各教科等において授業実践を通して明らかになった教師の資質能力を整理した結果、各教科等の枠組みを超えた汎用的な視点を抽出することができた。具体的には、授業構想力では、「学習のつながり」や「興味関心の喚起」等、授業実践力では、「思考を深めるための支援」や「協働的な学びを生起させるための支援」等、授業分析・評価力では、「指導のフィードバック」や「形成的評価」等の視点を抽出することができた。

さらに、授業分析・評価力に着目すると、単元を貫く発問を関連させた振り返り（社会科）や、期間を置いての事後調査（理科）、活動後のワークシートへの気付きや思いの記載（生活科）、ポートフォリオとしての振り返り（図画工作・美術科）、単元前後の技能テスト（体育・保健体育科）、ICEルーブリック（道徳科）等、多様な評価方法が用いられていた。各教科等で設定した教師の資質能力の妥当性を吟味するためには、児童・生徒の変容に基づいた吟味が必要であり、先述した内容を踏まえると、各教科等の特性に応じた評価方法を用いた吟味を行う必要があるといえる。

以上のように、各教科等で授業実践を通して、教師の資質能力の具体を検討した結果、教科等の枠組みを越えた汎用的な視点や、教科等固有の視点を明らかにすることができたといえる。一方で、児童・生徒の変容の見取りについては、各教科等において多様な手法が用いられており、各教科等の特性を踏まえながら、教師の資質能力の妥当性を吟味するプロセスについて共通の枠組みを設定する必要があるという認識に至った。

3 研究の目的

昨年度は、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」²⁾を研究主題として、各教科等で授業実践を通して、教師の資質能力の具体を検討した結果、授業構想力や、授業実践力、授業分析・評価力の具体の一端を明らかにすることができたといえる。一方で、児童・生徒の変容の見取りについては、各教科等において多様な手法が用いられており、各教科等の特性を踏まえながら、教師の資質能力の妥当性を吟味するプロセスについて共通の枠組みを設定する必要があるという認識に至った。そこで、今年度も引き続き、研究主題を「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」とし、各教科等で設定した教師の資質能力の妥当性について検討していく。その際、「逆向き設計論」に基づいた、授業づくりを行うことにした。

(1) 児童・生徒の変容を見取る逆向き設計論

Wiggins & Mctighe (2012) によれば、「逆向き設計論 (backward design)」は、求められている結果 (desired result) を明確にし (第1段階), そのことを承認できる証拠を決定してから (第2段階), 学習経験と指導を計画する (第3段階) という3段階で構成されると述べている。また、「逆向き設計」の要素は、到達目標 (goal), 本質的な問い (essential question), パフォーマンス評価や自己評価, さらに、フィードバックを重視した評価, すなわち形成的評価 (formative assessment) の要素も含まれる (名倉, 2022)。

(2) 教師の資質能力との関連

表1に示す教師の資質能力を逆向き設計論と関連づけると, 教師は授業を構想する上で, 事前に本時の目標を達成した具体的な児童・生徒の姿や, 児童・生徒の多様な考えを想定することが重要だと考える。また, 想定した具体的な児童・生徒の姿を踏まえて, 適切な目標を設定し, 教科等の本質を捉えて, 素材を教材化する必要がある (授業構想力)。その際, 想定した児童・生徒の多様な考えを踏まえた, 具体的な手立てを構想することが, 児童・生徒の学びを保障する上で重要だといえる。授業実践を行う際には, 事前に想定した児童・生徒の具体的な姿と, 実際の授業における児童・生徒の実態を踏まえながら, 授業構想段階で設定した手立てを講じる必要がある (授業実践力)。授業を分析・評価する際には, 事前に想定した具体的な児童・生徒の姿を踏まえ, 質的・量的な児童・生徒の変容に基づいて授業を分析することが重要である。その際, 児童・生徒や自身の授業実践へフィードバックしていく省察的実践家の振る舞いが求められるといえる (授業分析・評価力)。

以上の事から, 逆向き設計論に基づいた授業づくりを行うことにより, 授業構想力, 授業実践力, 授業分析・評価力の3つの資質能力を, 教師がより発揮し, 有機的に連動させることが可能になると考えた。

(3) 「教科等本来の魅力」との関連

先述したように, 逆向き設計論に基づいて授業構想を行うにあたって, はじめに, 求められている結果を明確にすることが必要となる。その際, 本研究の主題にも含まれている「教科等本来の魅力」の具体が重要になる。授業構想を行う際に, 「目標を達成した児童・生徒の具体的な姿」や, 多様な考えを想定することにより, それに付随して, 具体的な指導の手立てを構想することができる。また, 構想段階で, 教科等本来の魅力を踏まえた「目標を達成した児童・生徒の具体的な姿」を想定しておくことにより, 児童・生徒の変容に基づいた分析・評価を通して, 各教科等で設定した「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」の妥当性を吟味することが可能になると考える。

4 研究の方法

今年度の研究の目的である，各教科等で設定した教師の資質能力の妥当性について検討していくために，表 2 に示すような研究推進年間計画を設定した。

表 2 東雲小・中学校研究推進年間計画

日程	内容
4/4 小中全体会①	・主題説明提案 ・教科等協議→意見交流
6/1 小中全体会②	・逆向き設計論に基づいた具体的な授業構想例示 ・教科等協議→意見交流
7/6, 7/7 中学校プロジェクト研修	・小学校教員の中学校プロジェクト研修への参加
7/26 小中全体会③	・プロジェクト研修を踏まえた意見交流
8/24 小中全体会④	・教科等の基本的な考え方の交流
10/26 小中全体会⑤	・主題説明プレゼンテーション
11/18 研究会	
11/29 小中全体会⑥	・研究会振り返り交流（教科等）
2/8 小中全体会⑦	・1年間の研究のまとめ交流（教科等）
3/21 小中全体会⑧	・次年度の主題説明（案）提案 ・今年度のまとめ

特に，教員の「連携協働」を意識し，東雲小・中学校の授業交流や，各教科等における教師の資質能力に関する視点の共有に重点を置いて計画を立てた。

また，研究を進めるにあたって，図 1 に示すようなプロセスを踏まえて，逆向き設計論に基づいた授業づくり，及び各教科等で設定した教師の資質能力の妥当性の吟味を行うことにした。

なお，公開授業における，教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力との関連については，指導案の項目 9 に記載している。

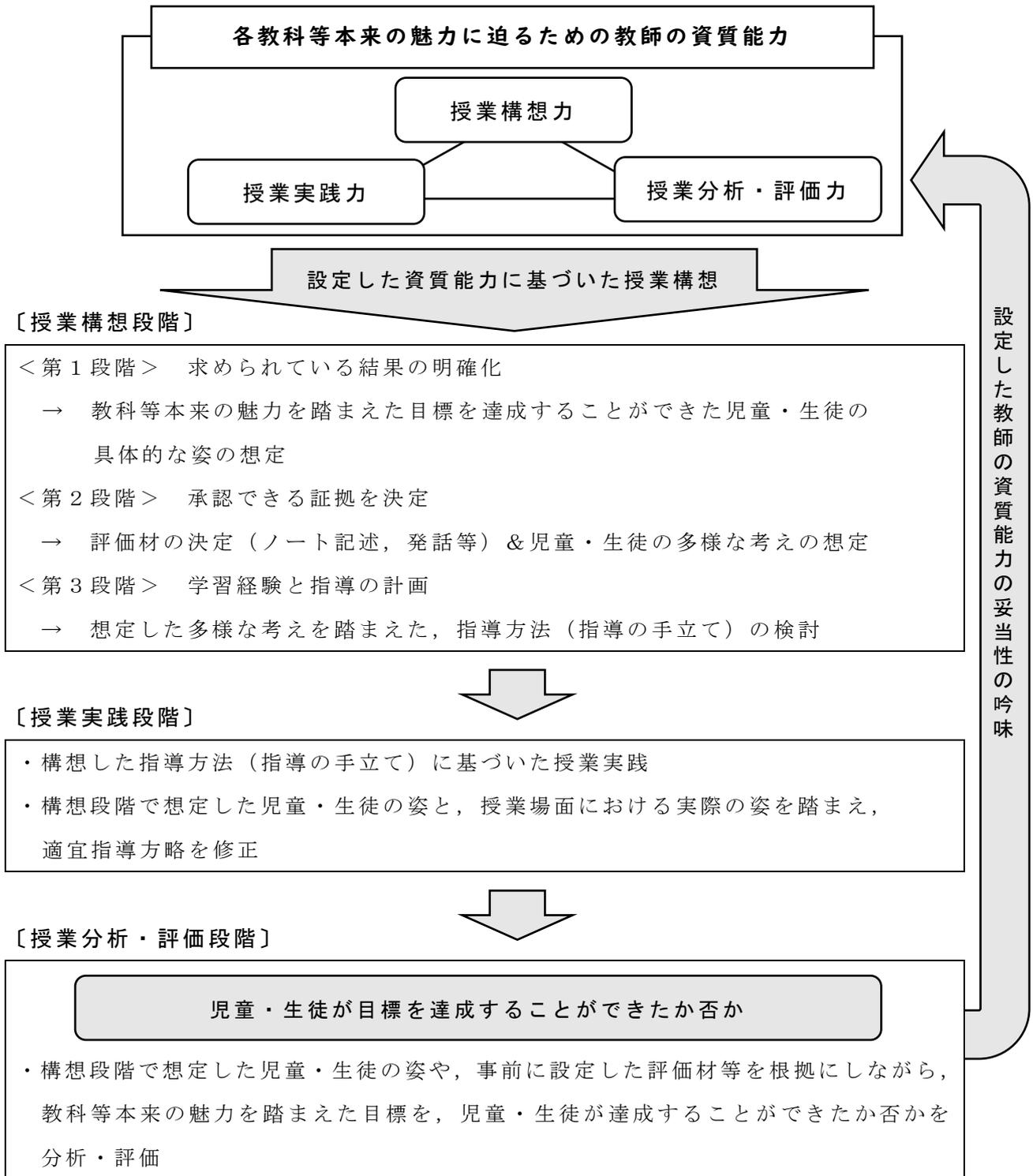


図 1：研究のプロセス

5 おわりに

令和4年12月には、中央教育審議会答申として『『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について～『新たな教師の学びの姿』の実現と、多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～』が示されたように、Society5.0時代を見据えた急激な時代の変化に対応して、教師は求められる知識・技能が変わっていくことを意識し、継続的に新しい知識・技能を学び続けていく、省察的実践家の姿勢を持つことが重要だといえる。しかし、各教科等本来の魅力（各教科等の本質）は、急激な時代の変化に対応する教育が求められる中でも、授業を通じた教育活動において重要な視点の1つであることは不変だと考える。また、本校では、毎年多くの学生に教育実習を実施しており、教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力を明らかにすることは、教師教育の視点から実習指導へ反映させることに通ずると考える。さらに、近年教員の若年化が進行している現状を踏まえると、各教科等における授業づくりの視点について、授業実践を通して公開することは意義があることであり、本研究が多くの先生方にとって、日々の授業づくりを行う際の一助となれば幸いである。

註

- 1) 各教科等で固有の見方・考え方を働かせ、本質を視野に入れた質の高い学びを行うことが重要であり、本校では、教科等本来の魅力と教科等の本質は同義であると捉えている。
- 2) 昨年度は、研究主題を「教科等本来の魅力に迫るための教員の資質・能力」としていたが、文部科学省の記載に準ずる形で、「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」と表記することにした。なお、個人を対象とする場合は「教師」、集団を対象とする場合は「教員」と表記している。なお、児童・生徒に関しては、学習指導要領に準ずる形で「資質・能力」と表記している。

〔引用・参考文献〕

- 中央教育審議会（2021）「『令和の日本型学校教育』の構築を目指して～全ての子供たちの可能性を引き出す，個別最適な学びと，協働的な学びの実現～（答申）」
- 中央教育審議会（2022）「『令和の日本型学校教育』を担う教師の養成・採用・研修等の在り方について ～『新たな教師の学びの姿』の実現と，多様な専門性を有する質の高い教職員集団の形成～（答申）」
- Donald A. Schön（2007）「4 行為の中の省察」柳沢昌一，三輪建二監訳『省察的实践とは何かープロフェッショナルの行為と思考ー』鳳書房，50-72.
- Grant Wiggins & Jay McTighe（2012）「第1章 逆向き設計」西岡加名恵訳『理解をもたらすカリキュラム設計 「逆向き設計」の理論と方法』日本標準，15-40.
- 石井英真（2014）「教員養成の高度化と教師の専門職像の再検討」『日本教師教育学会年報』第23巻，20-29.
- 石井英真（2017）「第1章 アクティブ・ラーニングを超える授業とは」『小学校発アクティブ・ラーニングを超える授業ー質の高い学びのヴィジョン「教科する」授業ー』日本標準，9-20.
- 名倉昌巳（2022）「パフォーマンス評価」『理論と実践をつなぐ 理科教育学研究の展開』東洋館出版社，240-245.
- 越智拓也（2020）「教師として生涯にわたって専門的に成長する（学び続ける教師）」磯崎哲夫編著『中等理科教育改訂版』協同出版，15-20.